

す・とうぶだより

9月

令和7年
(2025年)

過去の誌面



畑
隊員



初めて梅干しを干しました

6月に月ヶ瀬地区にある株式会社あめつちかえるさん主催の「梅仕事ワークショップ」へ参加して梅干しの作り方を学びました。早速仕込んだ2キロの梅干し。よく晴れた土用に干しそびれていたら、雨降る日が続く…雲の合間のお日様で、紫蘇も入れないまま慌てて干しました。

一応梅干しのようなもの、できました！☺️ 黄色く熟した梅ばかりを集めたので、ちゃんと梅の香りがするー♪ 熟しすぎて4分の1くらいは潰れて溶けちゃったけど笑。

梅の木が生えている家に住みたいと思いました！

農業活性化に取り組む地域おこし協力隊 山北さんにご協力いただきました

奈良市には、東部出張所で勤務している隊員以外にも、田原地区を中心に活動している地域おこし協力隊がいます。

このたび、その協力隊の一人である山北隊員に、8月2日に満天ひろばで開催した「宿題フェスタ」の素敵な動画を制作していただきました！

近日公開。公開リンクは協力隊FacebookかInstagram、すとうぶだより10月号にて。

山北隊員は、地域農業の活性化に関する活動の他、地域おこし協力隊の着任前にテレビ局で映像の編集に携わっていた経験をいかして、【たわら暮らし】というYoutubeを開設され、さとやまの風景を続々投稿されています。ぜひご覧ください。

★たわら暮らしQRコード★



地域おこし協力隊
Facebook



地域おこし協力隊
Instagram



9月の活動予定 (8/20現在)

- ・地域のイベントへの参加、取材
- ・SNS配信
- ・さとやま体験事業の推進

森川
隊員

とくし丸取材



移動スーパー「とくし丸」

今年の夏は身体に堪える猛暑が続いていましたが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。

協力隊に着任して半年経ちましたが、地域の方々とのような方法でお会いできるか、今も模索しています。私にとって協力隊の一番の喜びと醍醐味は「地域の方と接する」ことです。これからも自分がどのような形で東部地域に関わっていけるか手探りしたいと思っています。

さて、先月は移動スーパー「とくし丸」を見学させていただきました。大慈仙町発の「とくし丸」の後ろにくっつき、忍辱山町、阪原町、大柳生町を回りました。猛暑の中、毎回トラックから品物を出し、客がいなくなるとまたトラックの中に戻す作業をされる運転手の方には、頭が下がる思いでした。「常連のお客さんが欲しいものは必ず持ってくるようにしている」お客さん一人一人に優しく丁寧に話される運転手さんの姿が印象的でした。

ある場所では一人の男性客の方とお話できました。「妻を亡くして、今は一人で暮らしている。ケンカをする相手もいません。これがどれほど寂しいことか…」初対面のわたしにこのような心の声を聞かせて下さったこと、大変有難く感じました。

9月の活動予定 (8/20現在)

- ・SNS配信
- ・活動内容の検討
- ・地域の集まる場の企画 など

留学先での思い出



ボランティア先の仲間と

八月末になると、私はある夏の思い出が蘇ります。それは大学三年生、初めてアメリカに留学した時のことです。北東部マサチューセッツ州、州都ボストンから西に2時間ほど走ったところにあるアマースト (Amherst) という町が私の留学先でした。

それまで自分に自信がなく、どこか劣等感を抱いていた私は、アメリカではじめて「自分が解放された」と感じ、毎日を心から楽しんでいました。初めの数か月は楽しい日々が続きました。しかし、あることがきっかけで私は残りの留学生生活を泣いて過ごすようになります。そんな中、私はある場所で心の安らぎを見つけることになります。

アメリカに出発する数か月前に、私は祖父を末期の肺がん で亡くしていました。最期の一週間、祖父が「体が痛いから、さすってほしい」と私達に訴えましたが、看護師から「死期を早めるかもしれないから控えるように」と告げられました。祖父の最後の願いに応えることができないまま、その数日後に祖父は息を引き取りました。「人生の最期まで本人の意思は尊重されるべきだ」という思いが私の胸に残り、私は終末期医療に関心をもち、「ホスピス」という存在を知りました。

アマーストの町にもホスピスがあり、私はボランティアとして週一回通うことになりました。そこは、余命六ヶ月と宣告された方々が、行動制限なく「食べたいものを食べ、飲みたいものを飲み、行きたいところへ行き、会いたい人に会う」ことができる場所でした。すべての部屋から手入れの行き届いた美しい庭が見え、巣箱に来る小鳥のさえずりが聞こえていました。

その時、どこにいても不安で仕方がなかった私ですが、このホスピスだけは誰かに守られているような強い安心感がありました。「ここに私はいてもいい」そう感じられたのです。

ホスピスでは、生と死が等しく空間を占めていました。会話のできる患者さんの部屋からは家族やスタッフとの明るい話し声が、死が間近に迫った方の部屋からは静かで穏やかな讃美歌が流れてきました。患者さんと会話をする、食事の介助をする、車いすを押す、新聞と一緒に読む…私は残された命を懸命に生きておられる方々と豊かな時間を共有させて頂きました。

今も鮮明に記憶に残る方がいます。ユダヤ系アメリカ人の80代男性。彼はいつも私の帰り際、握手をしながら、全てを包み込むような温かい笑顔でこう言ってくれました。「God bless you. (神のご加護がありますように)」留学から20年経った今も、私は彼の温かい手とこの言葉に支えられています。